

Ⅲ 検証授業の実践

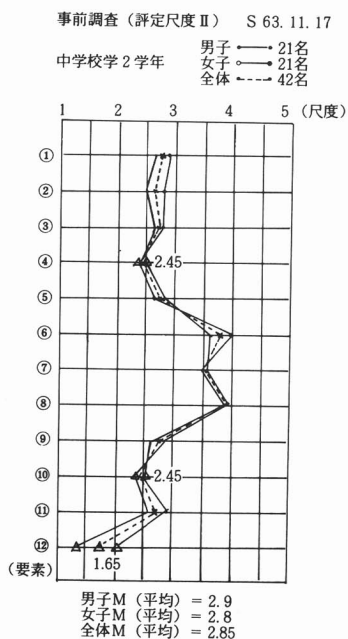
1. 実践計画の概要

情報活用能力が育成された状態像の具現に向けて中学校特別活動の領域における学級指導（第2学年）で具体的に実践することにした。実践の手順としては、まず事前調査（後述）の実施結果を分析し、特に低くとどまっている要素に視点をあて、それらを向上させるための手だてを考慮しながら進めることとした。

(1) 評定尺度Ⅱによる事前調査の結果と考察

① 調査結果からみた学級の傾向について

研究対象学級（福島市内の中学2年生）の評定尺度Ⅱ（P.101中学校自己評価表）による調査結果（下図左参照）では、全体的傾向としては女子の方が男子よりも若干低い値であるが、問題となるような差異は認められず、ほぼ似たような傾向を示している。特に低い要素（△印）としては、新たな情報の創造④、情報科学の基礎理解⑩、情報機器の具体的な操作⑫の三点が認められた。その中で要素⑫は最も低い値を示している。基礎調査の全体的傾向（P.97）からも分かる通り、パーソナル



ナルコンピュータの使用経験のない生徒が大半を占めている実態や学校での設置台数が現在2台のみであるという状況を考えれば、生徒たちが使用できる機会

が極めて少ないことは当然考えられる。特に女子は5段階評定で1を選択した生徒が71%を占めていた。

同様に要素④及び⑩においても、情報そのものに対する基礎的な知識を身につける機会が現状ではまだまだ少ないことが考えられよう。

これら低くなっている要素は、今後情報活用能力を育成していくための核となる重要なものと考えられるので特に留意しておきたい。その中でも要素⑫は、生徒が直接体験することが最も効果的であり、体験学習を通して身につけるべきものなので、この要素を中心にして、他の要素との有機的な関連づけを図りながら、情報活用能力を高めていきたいと考える。

② 研究対象生徒の抽出について

ここでは、事前調査の評定結果及びそれまでの総合的な学習の状況から、上位、中位、下位の3群に分類し、その中から特徴的な生徒を2名ずつ抽出して観察を試みることにした。なお、図-7には上位A男、中位C男、下位F子の3名の生徒の自己評価表を示した。

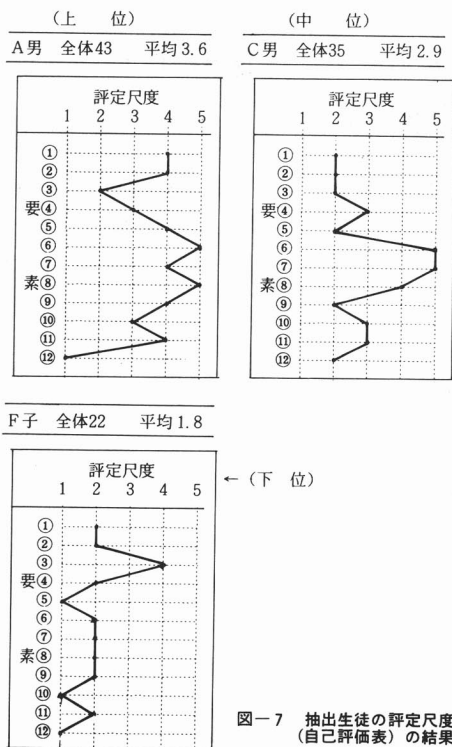


図-7 抽出生徒の評定尺度（自己評価表）の結果